北海道医報
ISSN 0913-0217　2026.2.1. 第1289号
発行人　北海道医師会長　松家　治道
編集人　情報広報部長　橋本　洋一
発行所　北海道医師会
〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目
TEL (011)231-1432　FAX(011)221-5070
URL http://www.hokkaido.med.or.jp/
E-mail info@office.hokkaido.med.or.jp　頒価 1部 275円(税込)

新年早々 不適切にもほどがある！

真面目な話、しちゃダメですか？

情報広報部　山科　賢児

「不適切にもほどがある！」が2年ぶりに帰ってきた。今回も主人公・小川市郎は、昭和から令和へタイムスリップした「昭和の熱血・不器用オヤジ」として描かれる。彼はタイムトンネルを使い、1987年、2024年、2036年を行き来しながら、娘や家族、そして社会の未来を少しでも良くしようと奔走する。昭和の価値観を引きずりつつも、家族を想う気持ちは変わることなく、令和の価値観と衝突しながらも前に進もうとする姿が、ドラマの大きな魅力となっている。

物語の中でも特に印象的なのが、2036年の新聞に映し出される未来の日本だ。「女性初の総理大臣」が誕生するものの、スキャンダル疑惑で就任3日後に辞任し、10日後には衆議院が解散。さらに放置すれば、次の政権が自衛隊の海外派遣を実行し、日本本土がミサイル攻撃を受け、消費税は28％に増税される――そんな衝撃的な見出しが未来の新聞に並ぶ。数秒しか映らない新聞のカットは単なる「未来の悪い冗談」ではなく、ドラマ全体のテーマを凝縮した強烈なメッセージとなっている。国内、国際ともに情勢が不安定化している今、決して荒唐無稽とは言い切れない未来として、2026年の視聴者に突き刺さる。

脚本家・宮藤官九郎は、この作品で日本社会が触れたがらないテーマにあえて踏み込んでいる。「不適切」とされるギリギリまで攻めなければ、伝わらないものがあると考えたのだろう。政治や社会との向き合い方を問う重いテーマでありながら、笑いとエンタメで包み込むことで、視聴者に「考える余白」を残している点が秀逸だ。特に、未来を変えられるかもしれないという設定は、「未来は決まっていない」「行動次第で変わる」というドラマのテーマを端的に表している。市郎が未来の新聞を見て動揺しながらも、家族のために行動しようとする姿は、我々自身のあり方を静かに映し出してくれる。

挿入歌「真面目な話をしましょうpart. 1」も、ただのミュージカル演出ではない。「政治の話を普通にしましょう、有権者なんだから」「大切な人の目をしっかり見て真面目な話をしましょう」という歌詞は、政治を語ることを躊躇する日本社会への痛烈な問いかけだ。日本では、政治の話は家庭でも職場でもタブー視されがちで、宴会で政治の話をすれば空気が悪くなる。しかし海外では、特にフランスなどでは政治を語ることは日常であり、家族や友人と食事をしながら議論することは普通の文化だ。政治を語ることが「意識高い」と揶揄される日本の空気とは対照的である。

日本で政治が避けられる背景には、「空気を読む」「和を乱さない」といった文化的価値観、戦後教育で政治や現代史を深く扱わなかったこと、そして「政治に期待しない」「どうせ変わらない」という諦めの感情が重なっている。ドラマはその「無関心と無知」の危うさを、未来の新聞という形で可視化している。市郎が未来を変えようと必死になる姿は、視聴者に「自分はどうだろう」と問いかけている。

さらに「真面目な話をしましょうpart. 2」では、「正しいやつが真面目とは限らない」「過ちを犯さない人間が正しい人間だって？」「正しいだけでつまんない、それで社会は良くなったかい？」と畳みかけるように問いを投げかける歌詞が登場する。形式的な「正しさ」ばかりが求められ、少しの逸脱でも炎上し、謝罪が迫られる現代社会への鋭い批評だ。「正しい」言葉を並べるだけで責任を取らず、行動しない政治はむしろ不真面目ではないか。ミュージカルという軽やかな形式だからこそ、こうした重い問いをユーモアとともに突きつけることができる。我々は笑いながらも現実の重みがもたらす言いしれぬざわめきを、心の奥底に覚える。

ドラマでは、未来がどうなったかは明確に描かれない。女性総理が辞任する未来、泡沫候補が首相になる未来、本土にミサイルが着弾する未来――これらは「確定した未来」ではなく、「このままなら起こり得る未来」として提示される。未来は勝手に悪くなるのではなく、我々の無関心や思考停止の結果として形づくられるのだという警告が込められている。

「不適切にもほどがある！」は、政治を遠い世界の話ではなく、我々の日常の延長として見つめ直すきっかけを与えてくれる。笑いとタイムトラベルとミュージカルを通して、「真面目な話を普通にすること」の大切さを、軽やかに、しかし核心を鋭く突く形で描き出す。クドカンらしい笑いと痛烈さが同居した作品だ。